

# 短歌

## 連作五首

6 加賀塔子◇枯れ野まで

## 連作六首

7 加賀塔子◇貧困と靴

## 連作七首

8 尾崎秋南◇解熱

9 尾崎秋南◇さそり座の針

10 甲斐いづみ◇青い歌

11 佐々木朔◇ライトモチーフ

12 関寧花◇最高気温十一度

13 染川嚶実◇まなうらの寝室

14 武田穂佳◇天使のリボン

15 手塚玄惟◇実験実習の日

16 森川千晴◇℞博士の日記

## 連作十二首

18 山崎有理◇北へ

## 連作十五首

20 阿部圭吾◇海岸をたどる

22 大村咲希◇冬の縁語

24 谷村行海◇Light colors

26 辻原僚◇食事のあかり

28 堂那灼風◇一級隔離封鎖都市

30 堂那灼風◇木星衛星軌道都市マルドゥーク

## 連作二十七首

32 佐々木遥◇この世の睫毛と光の邂逅

## 連作三十首

36 亀山真実◇境ふ／逆らう

40 谷村行海◇ブルーエイジ

枯れ野まで ◇ 加賀塔子

お父さんも傷つける人もこの部屋にいませんとまづ言はれ始まる

「手が出る」と二度言ひ直し殴るとはつひに言はざり臨床心理士<sup>カウンスセラ</sup>は

昼時の笑ひ話にととのへて心病みしを友らに告ぐる

大枯れ野駆け東<sup>ひんがし</sup>の岬まで幾人が来むわれの弔ひ

この人はわが葬送へ行く人か野の匂ひする地下の構内

\* かりん二〇一八年三月初出

貧困と靴 ◇ 加賀塔子

焼き増しの余りをもらふ花びらに余りはなくてみな桜花

「六人に一人」のひとり講義にて貧困層と呼ぶると知る

名前呼びされるのほんとはいやだつた 他人の靴を二度踏み帰る

奨学金継続だつて、よかつた、と打つ二分してよかつたを消す

君が手に啓かれてゆく鋭き岬 帆柱のごと鉛筆揺れて

かつてわが頬にほのほの痣ありしことを木陰の君には告げず

解熱 ◇ 尾崎秋南

花束を持たされておるときと似て黙って前を向いて歩いた

誰のための唇なのか雑誌には「愛され」の文字また赤呪われを塗る

残された微熱は熱のレプリカで短いままの髪に北風

雨の日は炎症しない もう一度ひとりに戻るために下りてく

存在に気づかないほどよく馴染むさびしさもまた家具のひとつか

梨を剥く丁寧にていねいにむき光をたべる 泣くには遅い

午前5時 断つ、絶つ、経つ、立つ、発つ、の字は花びらとなり風になづく

さそり座の針 ◇ 尾崎秋南

この肺が知らない海へ行くたびにノートに記すカモメの訛り

南風にサドルをつけて九月まで続く僕らのボーナス・トラック

森に降る雨を濾過してつくられたメロンソーダをめぐる冒険

騙されちゃいけないあれは「月」いう名前のついた夜空の裂け目

さそり座の針と、こと座の弦で縫う夜が零れてしまわぬように

レシートに神話を書こう眠らない背中のための灯火になる

海という言葉にきみが触れるとき想う水へいつか還るよ

青い歌 ◇ 甲斐いづみ

青春を謳いあげたる本をよけ鈍い指で買う「パチスロガイド」

夜気の中ひかりふるえるびいどろのピアスに映ったあなた一瞬

きみの横で違う男の夢を見た

フレンチトーストの砂糖を増やした

金曜の20時以降は空けておく会いたいと言われる予定なので

がんばった日にはシールを貼った手帳 4月は満点星空になる

コンビニと真夜中くらいの親和性を持ってあなたと生きていきたい

傘の下で雨に唄えば万雷の拍手をもらい帰る初夏

はっなっ

ライトモチーフ ◇ 佐々木朔

手紙とどいたんだ っっておどろく ゆうぐれのむしろ具象を縫ってあなたへ

三人組の三人目でもかまわない覚悟で冬の果樹園のぼる

植物に侵蝕されるフィクションの都市の路上できみと出会った

長電話しているうちに燃えてゆく幹どうやって告げればいいの

少年と呼ばれて遠い駅をはなれうなじのひかりについて歩いた

真っ青な画面が夜の教室に映って水族館にいるよう

そこはもう夜明けにちかい海岸で灯籠ずっと燃えていたんだ

最高気温十一度 ◇ 関寧花

大切な手紙を書くためのペンをキオスクで買うみたいばかみたい

ワンナイト・チェインスマーカーいつか全部あたりまえになるって言って

古書店の百円棚から動けずに、どこまで二番手なのか私は

快晴であればきらきらしただろうずっと好きってぶちまけた水

冬の月やさしいよやさしくないよ 会話が続かなくても平気

畏みたいにゆっくり廻るカルーセルどんなに予感したってつめたい

雪国の風を知ってる頬でしょうもうすぐ立冬だよ帰ろうか

まなうらの寢室 ◇ 染川噤実

まなうらに寢室を産む そのなかにだけほんとうの性愛はある

ひげきめくこともげんじつめくこともなくて長女の名をかながえる

封蝋のかわりみたいなくちづけが瞼のしたにことばをしまう

おそろいがうれしいなんて幼さでかさねる同じかたちの器

待つことをかすかな自慰とするためにまた眼球のかたちをさわる

ぎゅつとしたまま眠ってた貝殻の余生のようにだんだん冷めて

寢室に詩歌はなくて平熱があるだけだからとてもフィクション

天使のリボン ◇ 武田穂佳

前髪のくせで美容師こまらせてわたしは幸せになれるかな

すこしだけ寝たらやさしくなっていた午後の授業はやさしいわたし

商店街しろく真っすぐかがやいてみんながみんなみんな恋に夢中

土曜日のあちこちにげろ、げろ、げろ、げろ、ジャンプして みんなにあいたいな

リボンだよ みんなわたしを好きだって教わった夜のおでんのこんぶ

幸せになりたい幸せになりたい みんなの笑顔が天使に見える

あした着る服をかさねてその上にのせる靴下いちごのように

実験実習の日 ◇ 手塚玄惟

「真の値」それは何かと言問うに「誰見ざるもの」友は笑いき

ビュレットは数億年の水底にほのめく光を零していたり

日常の一部と言いつつ気が付けばバケツ三杯の廃液を捨つ

あどけなき記憶なぞらい廃液の淀みに消えた青、赤、黄色

刻限に押されて灌ぐ廃液はタンクの中で黒に変わりぬ

青白き硝子の夢を破りつつ車輪は複線交差にかかりぬ

港湾の時毎に移る波下を高架より見て我は帰りぬ

博士の日記 ◇ 森川千晴

総額に108かけて100でわり、端数集めて賽銭にする

ダークマター紅葉が吸い取る空色はいつたどこに消えるのだろう

「君にとって僕はパラメタだったんだね」遠い過去が頭をよぎる

取り込んだ洗濯物を微分して座標変換ハンガー揺れる

「インテグラルの持ち方で性格を判断します…Now Loading…」  
ビホバホビビ

星空に光年という物差しを。微粒子たちにマイクロ秒を。

for 文のように走るハムスター条件式さえ知らぬままに